

## 主の昇天

マルコ 16・15-20

2018.5.13

高円寺教会 9:30 ミサ

クラレチアン宣教会 梅崎 うめざき たかいち 隆一神父

イエスは、天の父のみ心が知りたいのであれば、幼子のようになれと言われて  
ます。確かに神様の言葉を理解することを難しく感じるとき、自分自身が子ども  
もだったときのことを思い出すと分かりやすい。今日の福音を聴き、家族と共に  
過ごしたときの喜びを思い起こしました。

わたしの家は貧しかったので、2つの部屋に9人が生活していました。寝る  
ときには、5枚の布団を敷いてしまうと、畳の上に敷いているじゅうたんが見  
えなくなり、布団を踏まなければ移動できなくなります。一面が布団になると  
ころに9人が寝るということをしていました。

ある日、私はお兄さんらしく妹たちを寝かしつけるためのお話をしようと  
思って、適当な話を作りました。「バロンという犬がいて…」と始めたのは良い  
ものの、話をしているうちに、自分のほうが眠たくなってしまって、逆に目が  
冴えてしまった妹たちのほうは「お兄ちゃん、それからどうなったの?」、「そ  
れでどうなったの?」と質問攻めを行い、やがて隣の部屋の母親の「早く寝な  
さい」という一喝で話は終わりました。

ある時は、無信心なわたしが寝ているときに、信心深い妹がお祈りをしてい  
ました。正座して一所懸命お祈りしてたら、わたしが寝言で「パンパカパン」  
って言ったようです。そしたら、妹のお祈りはもう続かなくなり、次の日の朝  
「お兄ちゃんどんな夢みてたん?」と言われました。

家は貧しかったけど、楽しいことがどういうことかっていうことをずいぶん  
学ぶことができました。そんな楽しい家にも、やがて、「進学はどうしたらいい  
のか」とか、「就職はどうしたらいいのか」とか、そういう悩みが押し寄せてき  
ます。貧しくても楽しく生きるだけでは誰も認めてくれませんし、新しい一步  
を踏み出すことは大変なことです。困ったこと、あるいは、自分たちの周り  
を見たときに、他の人たちは進学しているし、教会に行くと同じ学年でも学歴に  
よって扱われ方は変わってしまいます。周りの人が華々しく見えるのに、自分  
たちはそれができないという劣等感を感じ、自分の努力が足りないんじゃない

かと自分を責めてしまったりしました。その気持ちを受容するのはなかなか大変なことでした。

幼子のときの体験というのは、社会の中では金を稼ぐためには全く役には立ちませんが、人が生きるときの心からの喜びが何であるか、あるいは、神様がおっしゃる愛がどんな味わいなのかについてということを知るために、そういった家族の中での体験ってというのは今でも自分を生かしてくれていると思います。物ではなくて、目に見えない大切なものが人を本当に生かすのだということそのときに良く教えて頂いたと思います。

今日、イエスの昇天をわたしたちはお祝いしています。イエスは天に昇って、父の右の座に着かれます。それは何のためかと言うと、わたしたちが神様と一緒に住むためなのだそうです。ヨハネの福音書の中では、「わたしが父のもとに行くのは良いことです。父のところには住むところがたくさんあるから、あなたたちが住むための用意をいたします」と言われました。勿論、死んでから先の話ではなくて、わたしたちと共に今神様が住んでくださっているのであれば、わたしたちは神の家に住む、そういったことを今すでに体験している。イエスの内に父が住んでいるのと同じように、わたしたちの内に父が住んでいるのであれば、わたしたちは神様と家族として生きている。それがどういうものなのかということ味わうことは、とても大切なことです。

神様がお客さんとしてわたしたちの所に来るなら、それは困るわけです。「どうぞそんな偉いお客さんは、狭くてこんな散らかった家なんかに来ないでください」と、多くの主婦は心の底から思うでしょうし、やがて一緒に住み始めると、外国のことわざにあるように「魚と客は3日したらいやな臭いがする」から、「どうぞ神様、そろそろお帰りになったらいかがでしょうか」というふうになってしまうと思います。でも、家族はそういったくさい臭いがあっても、そういうわけにはいきません。困難を抱えたとしても、大事な家族とどうやって一緒に住み、赦し、受け入れていくのかを悩む時に、共に住む素晴らしさを証することができます。

家族の中においてわたしたちは貧しくても同じ食べ物を分け合って、夜一緒のお布団に入って、それから、外で嫌なことがあってもニコニコした顔で聞いてもらって、わたしたちは生きる力をいただきます。そして、もう一度人間らしくなって外にでかけて行くことができます。

天の父の右の座についたイエスは、そこでじっとしているわけではありませ

ん。例えば、司教座聖堂をいうのを皆さんご存知ですか？ 司教座という言葉には「座」が付いていますよね。「座」とは椅子という意味です。ですから、椅子は権威を意味する象徴です。だから菊地司教様もずっと椅子に座っているわけではありません。「天の父の右の座についた」とは、イエス様が父である神様の権威をいただいたことを意味しています。その椅子の権威は人々に仕えることで発揮されます。わたしたちと共に住んでくださる神様に支えられていることを、今日も喜びをもって人々に宣べ伝えることができるよう、このミサを共に捧げたいと思います。